

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
1 教務部 (目標を持って自ら学習フィールドを開拓する生徒の育成と、学びの深化を支援する)	①興味関心のある分野について、生徒自らが学びを深めることができるための支援を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・興味関心のある分野について、生徒が前向きに学ぼうとしていたとする保護者は94.5%で、今年度も高い数値を維持している。タブレットを持ち帰って学習の様子を見たり、高志学で発表する姿を見たりすることで、生徒が意欲的に活動をしていることを実感できていると思われる。また、中学校の学習内容の先取りだけでなく、高校の学習内容を、参考書等を用いて自分で学習を進めている生徒が増えてきている。6年間を見通した学習指導や進路指導の影響と、併設型中高一貫校の環境が影響していると考えられる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・タブレットの使用方法や使用時間の自己管理については、引き続き指導が必要である。AIの利用についても、あらゆる場面で生徒が使用することを前提とし、使用することのメリットとデメリットを正しく伝えることが重要である。校内で研修等を行うことで、不適切な使用についての理解を深めていきたい。
	②中・高教員が授業互見等を行うことで、6年間を見通した学習支援を研究する。	<ul style="list-style-type: none"> ・学習支援を研究することができたとする教員は87.5%で、目標を達成することができた。研究支援部や各教科において、授業互見を行う環境や雰囲気をつくりだす動きが具体化した成果であると思われる。さらに、複数の別教科の担当者が連携して授業を行う取組も新たに行われた。教科を横断することで、学びをより深いものにすることができた。 ・高校の進路支援に関する会議への出席は、今年度も十分とはいえなかった。授業の調整などを徐々に進めてはいるが、行事の精選などにより、引き続き相互に会議に参加できるような環境を整えていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業研究や行事について、中・高教員が参加しあえる機会を増やすことは引き続き推進していく。また、学習内容の研究だけでなく、学習の評価についても共通認識を持てるようにしていく。
	③習熟度に応じた学習支援や発展的な学習支援を通して、学習意欲を高め、深い知識と幅広い技能の習得を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ・高志中学校のさまざまな学習活動により、学習意欲を高め、深い知識と幅広い技能を身に付けることが、「A 大いにできた」と回答した生徒は、学年が進むにつれて増加している。これは、これまでの調査結果と同じ傾向を示しており、本校の学習活動の取り組みにより、生徒が自分自身の成長を感じていると考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・6年間を見据え、高校でも学力が向上していくよう基礎基本の徹底を図りつつ、生徒の興味や関心の幅が広がるための刺激を与えられるよう学習支援に取り組んでいく。 ・学習面で課題を抱える生徒に対して行っているエンカレッジ講座について、生徒の学習計画や希望をふまえて日程の設定を再検討し、より効果的な取組へと改善していく。 ・入学生に対し、教員間で指導方針を共有しながら、これまで以上に初期指導に力を入れて取り組んでいく。
	④「使える英語」の習得を目指し、英語の4技能をバランスよく伸ばさせる支援を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・「C あまりできなかった」を選択する生徒の割合が学年が進むにつれ高くなり、3年生においては英語で自分の考えを表現できたとする生徒が目標の80%を下回った。英語に対する苦手意識を持つ生徒の割合が学年を経るごとに高くなること、および、表現したいことが複雑化するにつれ英語で表出することに困難を感じやすくなることが考えられる。苦手意識を感じさせない指導方法や、使える表現を最大限用いてやりとりする姿勢を育む方法を探っていく必要がある。 ・英語弁論大会やディベート大会への参加希望者は学年を問わず多くいた。英語を積極的に活用しようとする意欲のある生徒の割合は高い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・英語で自分の意見や考えを伝える学習場面を、普段の授業により多く設定する。 ・習熟度別の授業のより効果的な運営方法を検討する。 ・海外研修等を活用し、日常生活で実践的に英語を用いる場面の充実をはかると同時に、英語によるコミュニケーションの成功体験を多く積めるようにする。 ・英語に対する苦手意識を感じ始めた生徒を早期に把握し、学びを支援していく。

<p>2 生徒支援部 (互いを思いやり、自ら考え、自ら律し、自分の属する集団の質を高めることができる生徒を育成する)</p>	<p>①生徒自らが企画・運営する学校行事を増やし、生徒が主体的に参加していると実感できるよう支援する。</p>	<p>生徒・保護者・教職員の全ての回答区分で目標値を達成することができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本校独自の行事である生徒交流会や学校祭中学生ミュージカル等において、生徒が企画立案・運営・振り返りまでを担う場面を意図的に設定したことで、責任感や協働性の向上が見られた。 ・併設型中高一貫校である本校の特性上、学校祭など高校生と一緒に学校行事が開かれるため、中学生が活躍する機会が少なくなってしまう。一方で、中学校単独で新たな行事を設定することにも制約がある。既存の行事の内容をより一層充実させ、生徒が企画段階から主体的に関わる仕組みづくりを進めていく必要がある。全ての生徒が役割を持ち、達成感を得られる運営体制の工夫が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・既存行事において、設置されている委員会等で生徒の裁量にゆだねる部分を増やし、企画段階から参画の意識を促すことで、生徒達がより責任をもって行事を運営できるようにする。 ・行事の後の振り返りを大切にし、生徒自身が成果と課題を自覚し、次の機会へとつなげる循環を確立する。
<p>3 研究支援部 (ふるさと福井)や社会の題を見つけ、その解決に向けて行動しようとする生徒の育成する)</p>	<p>②学校行事や部活動のあり方を工夫し、他学年の生徒や高校生との交流を通して、互いに認め合い、高め合う集団になるための支援を行う。</p>	<p>生徒・保護者・教職員の全ての回答区分で目標値を達成することができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学生による生徒交流会では、学年を越えた縦割り交流を実施した。生徒会および代議委員会が中心となって企画・運営を担い、全校生徒を主体的に動かす姿が見られた。学校生活に慣れた1月下旬に実施したことで、1年生代議員が部門を担当し、上級生へ指示を出す場面も見られるなど、学年を越えた相互成長の機会となった。 ・部活動においては、運動部・文化部ともに中高顧問間で連携を図り、適切な時期に高校生との合同練習を実施することができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・行事ごとに目的やねらいを明確化し、事前指導と事後の振り返りの充実を図ることで、リーダー育成や縦のつながりを軸とした学びの自觉につなげていく。 ・縦割り活動の成果を可視化し、校内で共有することで、互いを認め合う文化の醸成を図る。 ・本校においては、来年度も休日の部活動は現状維持の予定である。その中で、中高一貫校であることを生かし、本校の特色ある教育活動としての充実を図る。
<p>3 研究支援部 (ふるさと福井)や社会の題を見つけ、その解決に向けて行動しようとする生徒の育成する)</p>	<p>①地域社会やグローバル社会を多面的に理解し、発見した課題を解決しようとする態度や意欲を養うため、校内外での多様な挑戦や学年を越えた学びあいの機会を活用するとともに、「高志学」、教科、特別活動等の連携を深める。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・各学年の実践を共有し、「生徒が身につける資質・能力」を軸に、学年進行に合わせた目標設定と活動内容の再整理を行った。これにより、各学年が担うべき役割が構造化され、系統的な探究スキルの育成に向けた組織的な基盤を構築することができた。 ・「中学3年次での論文作成」という明確なゴールを全学年で共有したことで、1年次から問いの立て方や検証方法を意識した主体的な学びが見られた。さらに、発表会において高校との相互交流を実現したことで、中高一貫校ならではの学びの継続性と、より高度な探究への意欲喚起が図られた。 ・全学年共通掲示による「活動の可視化」を通じ、他者の視点を取り入れる環境を整えた。その結果、3年生は自己の成長を多角的にメタ認知できるようになり、下級生にとっては上級生の背中が次年度の活動指針(ロールモデル)となるなど、学年を越えた学びの相乗効果が生まれた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各学年の実践から効果的な手法や課題を抽出し、「指導の手引」として集約・更新することで、教員の指導力の平準化と支援体制の強化を図る。また、論文完成版だけでなく各学年の中間成果を全校で共有し、学校全体の探究文化を醸成する。 ・論文執筆をゴールとせず、「現状把握→問い・仮説→検証」というサイクルを回し、得られた結論から次なる課題を見出す姿勢を養い、高校での学びにつなげる。 ・大学や研究機関、地域社会等の外部機関との連携を積極的に推進する。専門的な知見や多様な視点を取り入れることで、探究活動の質を高度化させるとともに、社会との接点を意識したより実践的な学びへと発展させる。
	<p>②「高志学」を中心に教科学習を含めた学びの全体像を把握して、全ての活動経験を自らの力の伸長に生かそうとする姿勢を育成する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・いくつかの授業や高志学の取り組みにおいて、取り組み内容の積極的な情報提供や授業見学が行われた。 ・卒業論文において、生徒個々の問題意識と地域の具体的な課題がうまく結びつき、深い探究に至った事例が多く見られた。発表においても、「自分事」として自分の言葉でしっかりと表現できた。 ・NUSHほか他校の生徒との学びの交流によって、自分たちの学びの全体像を俯瞰できた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・研究支援部が中心となって、引き続き各教科の取り組みを収集し、高志学の取り組みを含めて、スキルや活動、生徒の変化などについて整理して情報提供を行う。 ・授業公開や授業記録、授業研究会などの機会について、各教科内にとどめず教科間等を含めた情報共有を図る。

4 教育相談 (安心して学校生活を送れる環境づくりを進め、自己肯定感をもって自分らしく生きることのできる生徒を育成する)	①教育相談担当者で、気がかりな生徒についての情報共有や支援方法を検討し、支援員・スクールカウンセラーを含め全教員で協力して、対象生徒の相談・支援を行う。	生徒・保護者・教職員の全ての回答区分で目標値を達成することができた。 ・毎週の学年会において、支援を要する生徒の情報を継続的に共有する体制を確立することができた。 ・教育相談担当者を中心に、支援員・スクールカウンセラーを含めた組織的な連携体制を構築し、多面的な視点から生徒理解を深めることができた。これにより、生徒一人ひとりの状況に応じたきめ細かな支援が実施できた。	・保護者へのフィードバックの機会を意図的に設定し、支援方針や対応状況を丁寧に説明することで、家庭との協働体制をより一層強化する。 ・教職員研修会等を通して、教育相談や特別な配慮を要する生徒への理解を深め、全教員の対応力向上を図る。
	②教育相談にかかるアンケート等を実施し、悩みや心配事を抱える生徒の早期発見・対応に努める。	生徒・保護者・教職員の全ての回答区分で目標値を達成することができた。 ・定期的にアンケートを実施している。そのアンケートには自由記述欄を設けており、生徒の思いを定期的に把握することができた。 ・アンケート結果を学年間で共有し、迅速に個別面談や支援につなげる体制を整えたことで、生徒理解が深まり、生徒は安心して学校生活を送ることができた。	・今後も定期的にアンケートを実施し、悩みや心配事を早期に発見し、初期対応など適切な対応を行う。 ・生徒が『Road to the Future』という日誌を毎日書いており、日常の生徒の思いが担任に届きやすい状況になっている。今後も継続していく。 ・次年度の年度当初に、担任による面接時間の拡充を図る。
	③教員や保護者対象の研修会を行い、生徒理解や気がかりな生徒の支援体制を整備し、支援の充実を図る。	生徒・保護者・教職員の全ての回答区分で目標値を達成することができた。 ・教職員に対して、高校と合同で気がかりな生徒に対する教育相談研修会を実施して、校種間での情報共有が進み、不登校傾向や情緒面に課題を抱える生徒への理解が深まった。 ・スクールカウンセラーによる保護者向け研修会を実施したことで、家庭における子どもとの関わり方や心構えについての理解が深まり、学校と家庭の連携意識の向上につながった。	・高校との連携をさらに深め、高志高校進学後の支援の連続性を意識した情報共有体制を構築する。
5 学校教育DX推進 (生徒の学びの支援や教職員の働き方改革の支援を推進する)	①デジタル教材、アプリなどのツールを活用しながら生徒の興味関心を高め、学習領域を広げようとする生徒を育成する。	ICT機器等を活用し、生徒の学びを支援することができた、とする教職員は94.1%で昨年とほぼ同数であった。全教科においてICT機器の有効活用ができていると考えられる。	学習の効果をさらに高めることにつながるICT機器の活用方法やアプリの導入について、継続的に検討を行う。
	②ICT機器やアプリなどのツールを利用し、業務の改善や効率化に取り組む。	デジタル採点、フォームなどを活用することで、業務を効率よく行うことができ、業務改善が進んでいると考えられる。	新たに導入された生徒用機器に対応し、さらに業務改善を行えるよう生成AIの活用を研究するなどの取組をすすめていく。